

地元産カラマツの活用を “デザイン”から考えるプロジェクトはじまる。



軽井沢の駅から歩いて10分ほど。樹々に囲まれるようにたたずむコンクリートの低層の建物が見えてくる。日本の現代洋画界を代表する脇田和さんの作品およそ1000点を収蔵する『脇田美術館』だ。これまでに、脇田さんの作品展を中心に、企画展、コンサート、建築ワークショップ、親子ワークショップなどを開き、地元の人や観光客などを楽しませてきた。

その『脇田美術館』が、新たな試みにチャレンジする。地元長野県産カラマツを使った作品を公募する『木のデザイン』プロジェクトだ。集まった作品を通じ、森林資源として継続的に活用する仕組みづくりを視野に入れた、息の長いプロジェクトになりそうだ。

公募に先立ち、20名の招待作家と3名の特

別出品作家による作品展がはじまっている。

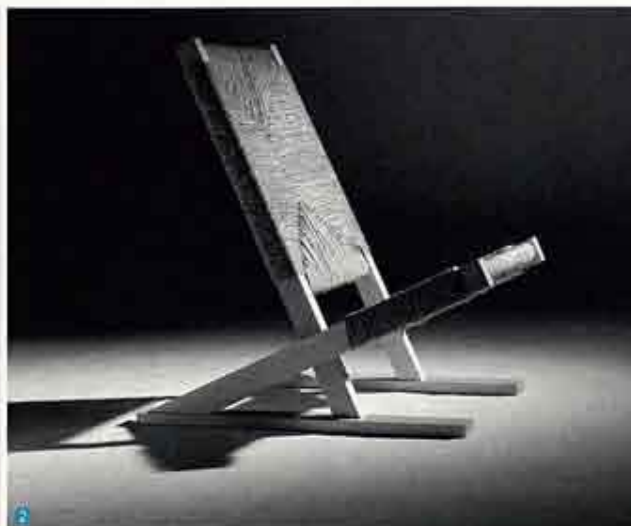
「日本は、世界で唯一といわれる木の文明を築き、多種の木を多様に使ってきました。スギやヒノキだけが木材ではありません。長野県は、冷涼地でカラマツが自生しやすい環境。今、高原野菜で有名な川上村には、貴重なカラマツの自然林もあります。江戸から明治にかけてはカラマツの苗木栽培にいそしんでいました」

招待作家のひとりディレクターの建築家の黒川哲郎さんは、長野県とカラマツの関わりをそう説明してくれた。しかし、そのカラマツもヤニや曲がりなど扱いが難しいこともあり、なかなか利用されなくなっているそうだ。

「日本のどこでも、同じような問題を抱え、いろいろな取り組みをしています。そんななかで、木

という素材をデザインするこのプロジェクトは、とてもスマート。公募展では、家具、照明器具、遊具など、様々な作品が出てくると思います。脇田さんは、ドイツに留学されて家具や建築にも興味があった。友人で建築家の吉村順三さんと共に、木をとしたモダンで新しい生活像を提示してきました。カラマツという個性の強い素材を使い、軽井沢から森林資源の可能性を問う、アートメッセージを発信していきたいですね」

今秋から作品の一般公募がはじまり、来年には展覧会、その先は継続的に公募していくという。そこから、新しい生活のイメージを創るプロダクトやグッズが生まれていくことも視野に入れている。軽井沢から発信される“人と森林資源をアートがつなぐ”プロジェクト、おおいに注目したい。



① 橋本和幸「縁と陽」2010年 カラマツ、ブビンガ、アクリル、オイル。② 松村勝男「ガマ椅子」2008年(デザイン1972年) 脱脂カラマツ。③ 深井隆「月の庭 一森に立つ」2010年 カラマツ、銅箔。④ 篠崎隆「トライローグ」[左2点]2010年 カラマツ皮付き枝、カラマツ集成材、トライローグ DIY。2010年 カラマツ板、カラマツ角材。⑤ 田中一幸「無識界」2010年カラマツ。⑥ 大場正「五・六 - x」2010年カラマツ、スチール。⑦ 手塚雄二「空待(からまつ)」(屏風)2010年 紙本、プラチナ。墨彩、緑・カラマツ、「浅間」(書)2010年 カラマツに墨箔、彩色。⑧ 美術館に並んで立つアトリエ山荘は、吉村氏によって1970年につくられた。写真:藤塚光政②、高梨光司③④⑤⑥⑦⑧。



『木のデザイン』招待作家展

日時:9月25日(土)~11月24日(水) 10:00~17:00

会場:脇田美術館(長野県・軽井沢町旧道1570-4)

休館日:10月16日(土)午後

入館料:一般1000円、大学・高校生600円、中学生以下無料

問い合わせ:脇田美術館 tel.0267-42-2639

*公募については下記HPをご参照ください。

<http://www.wakita-museum.com/>



Lohas Club

Since 2004